

木村定三コレクションの中国陶磁

森 達也

木村定三は主要な収集品である日本画のほかに、工芸を中心とする世界各地の古美術品をも収集した。その中で最も数が多いのは土器を含む陶磁器類で、日本、朝鮮半島、中国、東南アジア、西アジア、ヨーロッパ、新大陸など各地にわたり、文字通り世界中のやきものが収集対象となっていた。その内、中国陶磁は88点で、日本陶磁と比べると数量的にはかなり少なく、収集に大きな力を注いだわけでないことは明らかであるが、その構成内容をよく見ると、木村が独特の視点で中国陶磁を収集していたことがわかる。ここでは木村定三が中国陶磁に向けた眼について簡単に考察することとしたい。

1. 時代別内訳と特徴

まず、88点の時代別内訳から見てみよう。唐時代（618年～907年）以前に遡るものは東晋（317年～420年）1点、南朝（420年～589年）1点の僅かに2点で、どちらも日本人が「古越磁」と呼ぶタイプの青磁である。隋（581年～618年）、唐、五代十国（907年～960年）に位置づけられる作品は一点もなく、北宋（960年～1127年）が1点、北宋から南宋（1127年～1279年）が2点、南宋（華北の金王朝を含む）が7点、南宋から元（1279年～1368年）が3点、元が2点、元から明（1368年～1644年）が3点、明が55点、明から清（1644年～1912年）が3点、清が9点、清末から民国時代（1912年～1949年）が1点である。

多数を占めるのは明時代の作品55点で、前後の「元から明」の3点、「明から清」の3点を加えると61点となり、全体の約7割を占める。これに次ぐのは清の9点（約10%）と南宋7点（約8%）で、明とその前後の作品が圧倒的多数を占めていることがよくわかる。

日本の中国陶磁収集家は、宋時代の陶磁器を「宋磁」と呼んで最高峰に位置づけ、唐三彩や越州窯青磁、邢窯白磁など優れた陶器や磁器が生産された唐時代の製品にも関心を持つことが多い。ところが、木村定三は唐の陶磁器には全く関心を示さず、宋磁に関しても、北宋1点、南宋7点、南宋から元3点の合計でも11点、13%ほどで、強い関心を示していたとは思えない。数量的には明時代から清時代の陶磁器が中核を占めており、木村定三の中国陶磁への関心は主に明・清陶磁に注がれ、宋磁にも若干広がっていたと言うことができるのである。

2. 産地別内訳と器種

次に産地別と器種別に内訳を見てみよう。産地としては、景德鎮窯が47点と最も多く、これに筆者が景德鎮窯産の可能性が高いと考えているいわゆる「七官青磁」6点を加えると53点、約60%となる。次いで多いのは龍泉窯の9点、福建南部の漳州窯7点、建窯などの福建産陶磁5点である。他には広東省の石湾窯3点、徳化窯系2点、宜興窯2点、古越磁2点 (No. 1 [M1236]、2 [M2250])、吉州窯1点、耀州窯系1点、磁州窯系1点などがあるが、どれもわずかに数点のみである。この内訳から見て、木村定三の中国陶磁収集は景德鎮窯と龍泉窯の製品を主な対象とし、漳州窯と福建や吉州窯の天目へも収集対象が広がっていたことが明らかである。

器種別に見ると、青花が46点、青磁21点、黒釉・褐釉8点、白磁・青白磁4点、五彩3点、藍釉1点、紫砂2点、三彩1点、素三彩1点、土器1点である。青花が約半数、青磁が約4分の1を占め、この両者が主要な収集対象であったことがわかる。青花46点の内、21点が古染付、2点が祥瑞であり、明時代末期に日本から景德鎮に注文された青花磁器が約半数を占めている。青磁は21点中9点が龍泉窯であるほか、6点が龍泉窯青磁を模した景德鎮窯産の青磁である可能性が高い「七官青磁」であり、大部分が龍泉窯青磁または龍泉窯風の青磁である。

器形の内訳は、碗15点、合子（香合）12点、瓶（花生含む）10点、盤8点、皿7点、杯7点、鉢5点、向付4点、水注（湯罐含む）6点、香炉3点、小壺4点、壺2点、燭台2点、紫砂茶壺2点、硯1点である。

碗15点の多くは喫茶用の茶碗として用いることができるタイプであり、茶の湯を意識して収集された可能性が高い。

合子は中国では香料、薬品、化粧品、珠などさまざまな品を入れる容器として使われたが、日本では近世以降には主に香料を入れる容器＝香合として茶席をはじめさまざまな場で用いられた。

瓶10点は、茶席などで花生として用いることができるタイプが主であるが、No. 58 [M1634] は銚子または徳利などの酒器として茶懐石などで用いられたものである。

盤、皿、鉢、向付は食物を盛る器であるが、主に茶席の菓子鉢や、茶懐石の向付として使うことができるタイプが選ばれている。合計は24点で、中国陶磁全体の約4分の1強を占める。

7点の杯の内、No. 17 [M2223]、18 [M2229]、38 [M1652] は酒器の杯として用いることができるもので、No. 64 [M1550] ～66 [M1474]、83 [M1558] は煎茶の茗碗（茶杯）として使われたものである。

6点の水注の中で、No. 1 [M1236] の古越磁の水注は実用品ではなく副葬用の明器として作られたものであるが、近代以降の日本では煎茶席の水注として用いられることもある。No. 12 [M1557] の白磁水注は酒器として用いられることがある。No. 56 [M1188]

の古染付水注は、塗蓋が伴っており茶の湯席で手付き水指として用いられたことがわかるが、煎茶席の水注としても用いることができる。No. 82 [M1555] の湯罐は炉にかける湯沸かしであり、煎茶席の必需品である。

香炉3点も茶席と関連し、小壺4点の内2点 (No. 9 [M1409]、55 [M1410]) は茶入として転用されており、No. 33 [M2233] の小口の小壺は茶席で金平糖や甘納豆など小粒の菓子を入れる振出として用いられることが多い。

壺2点は、いずれも広東石湾窯の四耳壺で、日本では呂宋壺^{るそん}と呼ばれて茶壺として珍重されたタイプである。紫砂茶壺2点は、煎茶で珍重された宜兴窯の製品で、煎茶で最も珍重された茶銚(急須)である。青磁の硯も煎茶席の文具飾りとして用いることができる。

このように木村定三コレクションの中国陶磁は、大部分が茶の湯席または煎茶席に関連付けることができ、木村の中国陶磁収集の目的は茶の湯と煎茶の道具を集めることにあったと言っても過言ではないだろう。

3. 木村定三コレクション中国陶磁の特徴

前述したように木村定三が収集した中国陶磁の大部分は茶の湯と煎茶に関連するものであるが、木村は誰もが高く評価する本筋の茶の湯の道具を追い求めたのではなく、茶器として使えるものを見立てる感覚で、日本国内の伝世品であるかどうかにはあまりこだわらずに様々なものを集めている。

例えを上げれば、唐物の茶道具の中でも特に位置づけが高い茶入について、木村は肩付茶入や大海茶入など唐物茶入の代表的な名品を揃えるのではなく、龍泉窯青磁の小壺 (No. 9 [M1409]) や古染付の小壺 (No. 55 [M1410]) を茶入に仕立てた品を収集している。

茶壺についても、日本伝世の唐物茶壺ではなく、東南アジアで伝世または出土し、近年日本にもたらされた広東石湾窯の四耳壺 (No. 77 [M2211]、78 [M2210]) を揃えている。

唐物茶碗については、灰被天目 (No. 19 [M795]) は日本国内の伝世品があるが、他の吉州窯、龍泉窯、景德鎮窯などの茶碗は伝世品ではなく、近年日本にもたらされて、茶碗として見立てられたものである。

一方、煎茶器については、茶銚 (No. 80 [M2245]、81 [M1596])、湯罐 (No. 82 [M1555])、三彩水注 (No. 79 [M1556])、茗碗(杯) (No. 64 [M1550] ~66 [M1474]、81 [M1558]) については、江戸時代以降の伝世品である。

コレクションの中で特にこだわりが伺えるのは、古染付と祥瑞、七官青磁など明時代末期に日本から中国に注文した染付や青磁と、形物香合をはじめとする合子である。古染付は21点、祥瑞2点、七官青磁6点、合子は12点 (内、古染付4点、七官青磁2点) に及び、総計では全コレクションの3分の1余りに達している。

古染付と祥瑞は日本からの注文品であり、中国やその他の地域では使用された痕跡がないことから、大部分が日本伝世品と考えられる。七官青磁の一部も筆者は日本からの注文品と考えている¹。木村定三が収集した古染付は、瓶、碗、小壺などもあるが、多くは向

付や盤、鉢など茶席で用いる菓子器や茶懷石で用いる供膳具で占められている。また、古染付と同時代の日本に輸入されて「呉州赤絵」の名で珍重された福建・漳州窯の五彩の鉢（No. 76 [M2237]）もある。呉州赤絵は景德鎮窯を模して海外輸出用に大量生産された粗質の磁器で、中国国内ではほとんど受容されることがなく、日本や東南アジア、ヨーロッパなどに大量に輸出された製品であるが、その粗放ではあるが大胆な絵付けが日本人の心を捉え、江戸時代の日本で愛好された。このように、木村は精緻で華麗な中国陶磁ではなく、日本注文品や輸出用磁器など中国陶磁の中でもかなり特殊で、日本人の美意識を刺激するタイプを好んで収集していたことがわかる。

このことを更に端的に示すのが形物香合の収集である。形物香合とは、中国、東南アジアなどから輸入された合子と日本製の合子の中で、江戸時代に香合として愛好されたものの総称で、主に外型を用いた型打ち技法で造形されたタイプが多かったために「形物」香合と呼ばれた。種類は（古）染付、祥瑞、呉洲（呉州）、交趾（漳州窯の素三彩）、青磁（七官青磁）、宋胡録（タイ）、紅毛（ヨーロッパ）と国産の黄瀬戸、志野、織部、楽、伊賀、仁清、乾山などが含まれる。中国、東南アジアの製品は主に桃山時代から江戸時代前期に輸入されたものが形物香合として取り上げられているが、特に人気が高まったのは江戸時代後期以降で、江戸時代末期の安政二年（1855）に『形物香合相撲』番付[図1]が出版されて以来、多くの茶人や好事家が競って形物香合を収集するようになった²。

木村定三コレクションには『形物香合相撲』番付の東三段目二十位「青磁 酒會」（No. 7 [M1120]）、東五段目十八位「青磁 トキヤロ」（No. 28 [M1570]）、西四段目一位「呉洲 松毬」（No. 74 [M1571]）、西四段目二十三位「染附 小海老」（No. 70 [M1515]）に相当する4点のほか、西四段目十四位「染附 隅田川」の類似品（No. 69 [M1506]）や東二段目八位「サン蓋 青磁開扇」の類似品（No. 26 [M1503]）があり、また、本紀要には掲載していないが、西三段三位「染付 立唄香合」の模倣品（青木木米の印）もある。『形物香合相撲』番付に関連する香合は僅かに7点ではあるが、木村定三が番付を意識して形物香合を集めようと意図したと考えて間違いないだろう。

おわりに

木村定三は中国陶磁を収集対象とする中で、中国陶磁史を俯瞰しながら体系的に収集を



図1 『形物香合一覧』安政二年卯、愛知県陶磁美術館（青木美智男氏寄贈）

進めようとするような意図を持つことは全くなかったようである。その収集は、茶の湯や煎茶にかかわる、あるいは茶の湯席や茶懐石または煎茶席で使うことができる中国陶磁が対象であった。古染付や祥瑞、呉州赤絵、形物香合など、日本からの注文品や日本人の美意識にかなった粗製陶磁などを中心として収集したほか、さまざまな中国古陶磁を茶道具として見立てている。その収集意識の基調には、常にあそび心が存在したことが、コレクションを通じてよく伝わってくるのである。

(沖縄県立芸術大学)

註

- 1 森達也「十五世紀後半～十七世紀の中国貿易陶磁 ―沈船と窯址発見の新資料を中心に―」『関西近世考古学研究 十七』関西近世考古学研究会、2009年。
- 2 小田栄一『形物香合』淡交社、1986年。
野村美術館学芸部、愛知県陶磁資料館学芸課編『茶人のあそび心 形物香合』野村美術館・愛知県陶磁資料館、2013年。